

東北大学附属図書館報

木這子



BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

平成10年度東北大学附属図書館総合職員研修会

今年度2回目の東北大学附属図書館総合職員研修会は、「附属図書館が求められている、社会の高度情報化に適合した学術情報サービスを学内外に効率的に提供して行くためのサービス並びに業務の高度化」をテーマとして、以下のプログラムで開催されました。

日 時：

平成11年2月16日（火）13:30から17:00

場 所：

附属図書館2号館会議室

講 演：

「研究成果の電子出版とネットワークサービス」

内藤衛亮氏（学術情報センター研究開発部教授）

「大学における学術情報基盤について」

笹川郁夫氏（東京大学附属図書館総務課長）

今回の研修会は、電子図書館化の整備・充実に資するため具体的な事項についてのものであり、電子図書館化を先進的に構築し、サービス

を実施している大学の現状等について講演を願った。

始めに、学術情報センター研究開発部教授内藤衛亮氏から「研究成果の電子出版とネットワークサービス」と題して、外国の大学における現状、大学紀要の果たす役割等、電子原稿・テキストの普及等についてご講演、次に、東京大学附属図書館総務課長 笹川郁夫氏から「大学における学術情報基盤について」と題して、東京大学における情報基盤整備への取り組み状況並びに附属図書館と情報基盤組織との関わり方についてご講演いただきました。今回の講演内容は、本学附属図書館における電子図書館化の構築及びサービス等のあり方を検討する上でも大変に貴重なものであり、有意義な研修会であったと思われます。

また、研修会には学内外から約70人の図書館職員に参加していただき、電子図書館についての理解が得られ、研修の目的が果たせたと思われます。

（総 務 課）



中国の大学訪問—清華大学（北京市）・東北大学（瀋陽市）

金属材料研究所総務課図書掛 森 脇 ち か
情報サービス課参考調査掛 池 田 智 絵

平成10年12月11日から15日までの日程で、「東北大学教育・研究支援職員海外調査・研修事業」により、中国の清華大学（北京市）と東北大学（瀋陽市）の2校を訪問する機会を与えられた。当初は東北大学のみを訪問する予定であったが、工学部計測制御学講座長南研究室の江助教授の尽力により、清華大学にも行くことができた。さらに、引率・案内等全般を同研究室が引き受けて下さったことで、非常にスムーズにスケジュールを消化することができた。同行したメンバーは、門脇豊（理学部専門職員）、森脇ちか（金研図書掛）、井上香織（工学部研究協力掛）、池田智絵（図書館参考調査掛）と、長南研究室の長南征二教授、江鐘偉助教授、田中真美助手、松浦明技官 以上8名である。

以下はその簡単な報告と感想である。



（清華大学前にて）

1. 清華大学 (TsingHua University, 北京市)

清華大学は、政界の高官を多数輩出し、産業界とのつながりも深い非常に有名な大学である。中国国内の中でもその地位は高い。

12月11日（金）の夜、北京に到着し、そのまま清華大学内の宿泊施設へ入った。

中国も週休2日制であるらしく土日は休みで

あるところを、翌12日（土）の午前中に時間をとってもらって、学術国際交流委員会秘處長の張良平教授との懇談が実現した。公式行事はそれのみで、その後清華大学の郭教授の案内で大学内を見学して歩き、図書館の中も若干見せてもらった。

張教授との懇談では、今回の訪問団の引率者である長南教授が代表として、主に互いの大学の現況等について伝えあった。また、会話は中国語および日本語で行われたが、今回全般にわたってマネージメントをして下さった江助教授の通訳により滞りなく進んだ。

話の内容としては、学生数や予算の状況、海外との学術交流といった一般的な話であったが、逆に両大学の違い—日中の国情の相違といってもいいだろうか—が際だった。最も印象が強かったのは、清華大学では経費の相当分を、研究成果を製品化し自大学内にある会社組織により販売することで賄っているということである。（国からの予算配分は全体経費の1/4とのこと。）1997年は15億元の生産3億元の利益で、これは全国1位の利益高だったという。さらに、この、どの程度稼ぎ出せるかということが、大学の実力を知らしめる一つの指標となっているということだ。

また、当然といえば中国では当然なのかもしれないが、学生や教官は、留学生等も含めてすべて大学内にある宿舎で生活している。今後清華大学ではさらに留学生受入の拡大を計る予定だが、そのために宿舎の増設を考えているということだった。少なくとも住居については留学生は心配する必要はない。

図書館については、館長が現在物理の教授であること、職員は、最近は学歴を考慮し、採用



(清華大学附属図書館)

試験も行っている、またコンピュータ関係に強い人が多い、という話を聞くことができた。

清華大学図書館はキャンパスのほぼ中央に位置する、新館旧館の二棟からなる大きな図書館である。詳しい話は聞けなかったのですが、これはパンフレットからのであるが、面積は約2万8千平方メートル、所蔵図書251万冊、職員数165人。東北大学の本分館を合わせたよりも若干小さい規模である。蔵書構成は、通常図書だけでなく、古典30万冊・マルチメディアディスク200種余・CD-ROM10種・マイクロフィッシュ7万枚・視聴覚資料5千点と様々あるようだ。特に、理工系の大学ながら古典の30万冊という数の多さには驚く。

図書館見学では、ざっと中を見て回っただけであるが、勉強している学生が多かったことが印象に残っている。また、端末のたくさんあるCD-ROM検索室や一階ホールのパソコンスペースをみると、思っていたよりも電子化への比重が高くなっているようだった。張教授の言葉を裏付けるように、確かに電子関係が充実している印象を受けた。

そういう話を聞いて帰国してから改めて清華大学図書館のホームページを見てみたのだが、やはり結構充実している。(http://www.lib.tsinghua.edu.cn/english/)OPAC検索も問題なく行えるし、WWW版の利用案内・2次情報データベースのオンライン検索等、日本の大学と比べて見劣りしない。案内してくださった

袁教授が「研究室から色々検索できる」と、特に問題もないように話してたことから考えても、ネットワーク環境も悪くないことが想像できる。

ただし、次の瀋陽市の東北大学をみると、中国国内の大学の全てが清華大学のような環境ではないようである。たまたま清華大学は中国の学術情報ネットワーク(CERNET)の全国の中核校であるからこのような環境があるのではないだろうか、と想像している。

図書館でおもしろいと思ったのは、大学で制作したCD-ROMをCD-ROM検索室で販売していたことだ。中国の切手集成とボタラ宮殿と故宮の3種類があった。先の懇談で聞いた話を思い出した。これも、自大学への利益還元の一つなのだろうか？

ちなみに、切手集成を買い、日本に戻ってから試したが、切手の画像からその時代の歴史的背景まで簡単な概略を知ることができ、ちょっとした百科事典のように使えそうだ。

(いけだ・ともえ)

2. 東北大学(Northeastern University, 瀋陽市)

12月14日瀋陽市の東北大学を訪問しました。北京から空路約50分、中国東北部、工業を主として発展した人口800万の都市遼寧省瀋陽市、その中心部よりやや郊外、雪原の巨大都市といった趣の中にその大学はありました。

1923年、東北部最大の理工系大学東北工学院として創立。図書館の同時に創設されその後1993年東北大学と名称を変更し、現在に至っているという。楊懐館長、郭偉副館長の両先生より図書館についての詳しい説明と紹介を受けた後、館内を案内していただきました。施設は大学内のほぼ中央に位置し、総面積1万6千平方メートル。蔵書数約120万冊、うち画内国(中文)図書80万余冊、外国図書40万余冊。

職員数94名、郭副館長の説明によりますと職称は管理員(卒業後1年)、助理館員(助手待遇

＝4年）、館員（講師待遇＝5年）、副研究館員（助教授待遇＝5年以上）、最高位が研究館員（教授待遇）と分かれていて、勤務成績に応じて、順次上位の階級へ推薦されるという。館員については、論文提出が義務づけられ学内で協議の上採用される。又、研究館員についても更に厳しい条件が課せられ、採用は省内（遼寧省）の専門家グループで協議決定されるという。現在東北大学では副研究館員も含め、9名の研究館員がいるとのこと。資格や任用制度については、最初に訪問した清華大学とも違い、国内でも一様ではないようでした。



（東北大学附属図書館）

図書館の電算化についてはまだ、十分に整備はなされていないようで、学内LANには1995年より接続し、目録は一部機械処理されているとの説明がありました。MarcについてはChinaMarcとLCMarcを使用。学内蔵書データベースとカード目録作成を同時に行っているが、オンライン目録への一本化はされていない。閲覧関係について、開館時間は学内夜間部

に対応し夜9時30分まで。各閲覧室はそれぞれ参考図書室、科学技術雑誌室、外文（外国）図書室、人文科学図書室等に分かれており、各室毎にカウンターがあって職員が配置されていました。座席はどの部屋も、一心に読書する学生達ではほとんど満席でした。検索サービスについても現在導入しているデータベースは少なく、省（遼寧省）雑誌総合目録、学内の修士、博士論文等で今後充実を図っていく予定とのことでした。又ILLについては遼寧省内と北京の中国国家図書館（中国の国会図書館）間のみで行っているということです。

東北大学は図書館のみならず他の分野に於いても清華大学同様、国内東北部地域の学術情報の発展基地として重要な役割を担っている、という自信が感じられました。

今回、本学初の事務官海外研修派遣ということで、緊張と不安の中、仙台空港を飛び立ちましたが、中国大学側関係者の暖かい歓迎ぶりにその不安も消え、非常に有意義な研修を終えることができました。

中国と日本、国は違っていても大学図書館に働くもの同士が、同一の資料にふれインターネットを通して交信している。近い将来日中の大学図書館員が自由に両国を訪問するようになる。そんなことも夢ではなくなるかもしれません。

最後になりましたが、この研修にあたりご尽力下さいました中国側大学関係者、および本学関係者各位に深くお礼を申し上げます。

（もりわき・ちか）

「3年間で振り返って」

事務部長 辻 秀 雄

本学に赴任する以前、本学附属図書館に関して抱いていたイメージにはいろいろありますが、その主なものは鬼頭梓氏の設計による広々とした空間構成と斬新なデザインの本館建築、図書館資料の集中化による効果的な共同利用、狩野文庫を初めとする多くの貴重な資料、本館・分館体制を採用することによって一元化された組織、図書館活動に関する調査研究機能をもつ調査研究室の存在、などなどです。数大学の図書館を経験して、改革・改善が必要な課題と思われたものがここでは既に解決・採用されている印象を受けたからです。

担任当初はイメージ通りだとの感想でしたが、ある期間を過ぎるとこれらにも新たな問題が潜んでいることを、そしてこれまで知らなかった別の素晴らしい面もあることを多く発見しました。

地下2層の書庫、地上2階の管理と閲覧のスペースからなる4階層、約12,400㎡の広さをもつ1号館。玄関を入ると中央に明るく開放的な空間のメインホールが広がり、書庫入口を背にしたメインカウンター、目録カードケースや検索端末、奥には参考カウンターと参考資料群が配置され、ホールの両サイドは利用者の閲覧スペース。従って何時もこの中央ホールが利用者と図書館職員と資料群を結ぶ接点となり、活気溢れる空間となっています。やはりこれは図書館活動のあり方を原点で捉えた鬼頭氏や当時の図書館職員による素晴らしいレイアウトだとの印象が今も続いています。

広さ28㎡の私の部屋で、事務机の前にある両腕で二抱えもあるコンクリート柱との睨めっこに飽きた後、2階のバルコニーに出てメインホールの活気溢れる光景を眺めるのが大きな楽しみでした。

しかし、この建物も築後25年。寄る年波には勝てないようで、雨漏りは何とか対策を講じられたものの、冷暖房装置を初め照明器具や閲覧机等の施設・設備類の老朽化（鬼頭氏はこれらをローコストで何とか間に合わせたいと書いている）と時代遅れが目立ちます。さらに、建築以降の学生増に見合った座席数や学生用図書不足、情報化と言う時代の大波への対応の難しさで利用環境が一段と悪くなっています。また、何時襲ってくるかもしれない地震のために耐震壁による補強も必要とされています。

一般に1つの建物で図書館の諸機能を凝縮し完結させた場合、それに増築や改造を加えると格段に機能面や使い勝手の面で悪化します。最近の多様な利用者ニーズや時代の要請をも満足させ、かつこの建物の良いところを活かした改修・増築が出来ないか、さらに2号館と機能的に一対化した活用は出来ないか、何か良いアイデアを搾り出そうとバルコニーから眺めながら考えたことも今では懐かしい思い出となっています。

本館の所蔵冊数は約230万冊で、その大半は地下書庫や雑誌書架等に収納されています。これだけの資料を集中化している大学図書館は全国でも珍しいが、それ以上にこの集中管理は法文学部が創設された大正11年からの伝統であると聞いて一層びっくり。研究のためには資料を研究者の身近に言う主張と誰もが利用可能にするためには一箇所に集中すべきだと言う主張の対立は絶えず大きな大学図書館を悩ませてきた命題で、それを解決し、今大学図書館界で合言葉になっている「資源の共有」を既に80年あまり前から実践しているのです。しかも、狩野文庫を始め、フント文庫、ゼッケル文庫等々の個人文庫や個々の貴重な資料なども含み、量の多

さと質の良さは目を見張るものがあります。それらが書架上に無造作におかれていることに対して一部研究者から心配の言葉も聞かれるほどです。

この理想的な集中化は職員が利用者の要求資料を書庫から探して来る出納方式を採用し、入庫者を院生や研究者に制限することによって維持されています。しかし、今では学生から書庫内資料の自由な閲覧を求める声が強く出ており、また職員の減少からも、何らかのシステム装置を駆使して資料の損傷や紛失を未然に防ぎ、かつ職員の手数のかからない自由入庫方式などを考えねばなりません。

現在、調査研究室から書庫内資料を調査し、別置して保存に重点を置かねばならない貴重・準貴重資料を選別し、その目録を作成する事業を行っています。また貴重な資料の補修・帙作成などのほか、マイクロフィルム化、デジタル化、フォトCD化も一部着手しています。原資料を確実に保存し、かつ利用者の便を図る方策が求められるのも、貴重資料を多く持つ図書館の悩みの一つだったのです。

資料のデジタル化と関連して、最近、電子図書館的機能充実・強化が求められています。本学の特色、個性を活かした電子図書館とはどのようなものか、図書館職員による検討委員会を設置して検討を重ねています。図書館の力量で可能なことから手をつけはじめたところで、研究・教育に欠かせない学術的なデジタル情報の収集と提供、本学が生産する先端的な研究成果や図書館が所蔵する資料およびそれに係わる情報の発信・提供など、本格的な電子図書館への歩みはこれからです。早急に長・短期的な基本計画を策定し、全学的な支援のもとで実現していかなければなりません。

昨年、図書館が所属する貴重資料の展示会を開催し大変好評でした。その際、「このような

展示会を頻繁に開催し大学を身近なものにして欲しい」と言う市民からの強い要望も出ています。大学と地域の人達との懇談の席で「大学は地域社会に何も貢献していないではないか」と言う発言があったと聞き、仙台を「杜の都」と同様に「学都」と呼ぶのは大学人の勝手な思い込みだったのかとの印象を受けました。図書館が本学の教育・研究を支援する本来の使命を第一に果たすことは言うまでもありませんが、知的資産の公開—学術情報の提供と言う形で地域社会へ貢献することも重要なことになってきます。上手く両立させて実施する方策が求められるところです。

さて、私も本学を最後に公務員生活が終わります。今、大学図書館勤務の35年間を振り返って見ると、絶えず背後から「改善・改革」の言葉に追掛けられてきたような気がします。この文章も楽しい思い出を綴れば良かったのですが、現在の図書館が抱えている問題点の一部を拾い上げただけになってしまいました。これも長い年月の間に身にしみ込んだ性でしょう。

次々と出てくるいろいろな課題に取り組んでいくことは現に図書館を利用し情報を求める人の要望に応えるだけでなく、書庫内に眠る万卷の書の著者達の「利用環境を整えて俺たちの知識・思想をより多くの人達に伝えて欲しい」と言う声なき声にも応えることであり、またこれは大学図書館の使命でもあると思います。

最後に、伝統と輝かしい実績を持つ本学附属図書館が学内外のいろいろな関連機関の支援と協力を得て新たな図書館活動を創造し発展していくことを願うとともに、この3年間、いろいろ教えてくれた「附属図書館」—過去・現在にわたって築き育ててきた人達、所蔵されている資料、建物、そして図書館を訪れた利用者等の全てに感謝して筆を擱きます。

(つじ・ひでお)

思 い 出

医学分館事務長 村 岡 徹

東京オリンピックが終わって昭和40年代に入り、戦後の復興が一段落して新たな時代に入ったところでしょうか、空腹は満たすことが出来るようになり、物不足は解消されようとしていたと思われます。

ドーム型の薄暗い閲覧室、豪華なシャンデリア、櫛の閲覧机、床に敷いた油の匂い、壁際に配架されている皮表紙のブリタニカ等々、附属図書館本館（現在記念資料室）は帝国大学面影をまだ残していました。

対照的に館内は、新しい図書館教育を受けられた若い多数の館員がこれからの大学図書館のあるべき姿について議論を交わし、それに向かって取り組み活気に満ちていました。このような状況の中に右も左もわからず飛び込んでから33年が過ぎ去ろうとしています。

閲覧掛から間もなく和漢書目録掛に移り、目録編成に携わりました。ようやく簡便な和文タイプが普及し、目録カード書誌事項をタイプし、コピー機がまだありませんでしたので必要枚数作り、ファイルしておりました。当時はこのように、今云う手作りでやっておりましたが、暫くして謄写版用の原紙が普及し、原紙にタイプし、カードの印刷は外注することになりました。

国が豊かになるに従い図書資料費予算も大きく伸び、このような目録業務では対処できなくなり、図書の手続を依頼すると半年はかかる、新刊書が書架に並ぶまでに時間がかかり過ぎる等の不満が大きくなってきました。

国会図書館、LCマークカードの利用等改善を図りましたが、解決にはいたらなかったようです。

目録業務をする者の特権であり、楽しく有意義だったことは、国内外の新刊書、古書、珍本、

豪華本を手にとって見る事ができたことです。生来読書家ではないのですが、たまには面白そうなものは読み、薄給ではありましたが、たまには書店に注文し、書物に興味を持つことが出来たことです。

当時すでに、片平地区の文系4学部、理学部、工学部の青葉山、川内地区への移転が進められて、図書館も文系4学部の移転後、川内地区への移転が決定しており、新しい図書館の持つべき機能についての検討が進められていました。

近代図書館、従来の資料の管理保存の図書館から、資料、情報を利用者に積極的に提供する図書館への脱皮が期待されている折、それらについて幅広く議論されました。それが結実して、新館開館と同時に、閲覧課に参考調査掛、相互利用掛が改組新設されました。目録においては、国立国会図書館の分類表を部分修正したものを採用、新たに書名目録、学内総合目録を編成することになりました。新設の参考調査掛に移り、レファレンスを担当することになりました。ここで去る1月23日ご逝去された高木忠さんと机を並べることになりました。高木さんとは以前から同世代の同僚として共に働き、共に遊び（苦笑いをしているかもしれません）、お付き合いさせていただきました。

2年でこの掛を離れましたが、高木さんは草創期から22年間にわたってレファレンスサービスを相当され、本学のレファレンスサービスの基礎をきずかれ、発展充実にご尽力され、レファレンスコレクションの組織化と紹介、図書館利用オリエンテーションの実施及び利用案内ビデオの作製、院生への文献検索演習の実施、各種マニュアルの作成、後進の育成等々多くの功績を残されました。さらには狩野文庫マイクロ化、

狩野文庫目録編纂事業に参加され、国立大学図書館協議会賞受賞の栄誉に輝きました。

私が定年をむかえる時に高木さんが前に向かってひたすら走り、道半ばにしてこの世を去られたことは、無念としか言いようがありません。ご冥福をお祈りいたします。

約20年を経て洋書目録掛に移り、再び目録業務を担当することになりました。すでに本学においても図書館業務電算化のスケジュールがきまり、各業務について検討が始まり、目録業務の主査を担当することになりました。

電算化にあたっては真正面から取り組むには年齢的に無理があり、さりとて避けて通れる立場がなく、右往左往しましたが、全学の若い職員の方々が寝食を忘れ、昼夜をとわず稼働にむけて努力していただき、頭が下がる思いでした。さらに、一段落して夜遅く反省を込めて盃を交わしたことは充実感とともに良き思い出となっております。

電算化により目録作成は、図書目録情報を目

録データベースに登録することに大きく変貌し、図書館が目録カードから開放されることになったわけです。この変貌を直接経験して身が軽くなったような思いになると同時に図書館が真の利用者、研究者のための図書館へ変貌脱皮することを確信しました。

三十有余念の3分の1目録業務に携わり、あまり経験出来ない変革に遭遇しましたので、そのことについて書いてまいりました。

その後、参考調査掛、閲覧第一掛に移り、最後の5年間は宮城教育大学附属図書館、医学分館にお世話になりました。その間のことについても種々書きたいことがありますが、省略させていただきます。

長い図書館生活の種々の場面で人と出会い、ご支援、ご指導をいただいたことに深く感謝するとともに、現在国立大学、大学図書館を取りまく環境は種々の問題が山積し、厳しい状況にあります。辛抱強く解決して、新たな発展にむかはんことを念じております。

(むらおか・とおる)

回 想

情報サービス課図書館専門員 菅 野 博 之

月日の経つのは早いもので、3月31日をもって定年を迎えることになりました。想えば、昭和33年9月に奉職してから平成11年3月まで40年7ヶ月が私にとっては、非常に短く感じられ「もう定年の時期になったか」と思うとき、楽しかった思い出苦しかった思い出が、走馬燈のようにかけめぐり感無量になる。そこで、私の履歴をたどりながら当時の記憶を思い出してみたい。

私が、図書館に採用になったのは、昭和33年9月3日である。なぜかこの日が未だに忘れられない。当時の図書館は、片平キャンパスの現

在の東北大学記念資料室であり、傍に5階建の書庫が隣接して、1階の事務室からと2階の学生閲覧室からの渡り廊下でつながっていた。最初に運用掛へ配属され、朝夕書庫の1階から5階まで窓の開閉、閲覧カウンターでの図書の出納が主な仕事でした。図書館で最初に興味を持ったのは、欧文タイプライターです。1階の事務室に行くと、洋書目録掛ではベテランの方々が軽々とタイプライターを打っているのを見たとき、自分もあのように打てるようになりたいとの一心で、昼休みや仕事が終わってから、必死になって練習したものでした。

昭和36年1月から8月まで総務掛で文献複写の仕事に携わり、9月から受入掛に移り昭和43年5月まで、図書の購入受入・受贈受入等の仕事を行いました。その間、昭和38年8月に夏期司書講習を東京の東洋大学で受講させていただき、図書館人としての自覚をもった次第です。

昭和43年6月から昭和46年3月までの3年間は、図書館の受入掛に籍をおいたまま工学部併任となり、青葉山に移転した工学部管理棟の2階に設置された中央図書室に勤務することになりました。当時は、各学科の学科ごとに図書室があり、支払いを含めた整理業務はすべて本館で行っていたので、図書が学科図書室に戻るのにかなり時間がかかっていました。そこで昭和41年6月に理学部、8月に工学部に中央図書室を設けて整理業務（受入業務）を行うことになったのです。そこでの生活は、仕事は勿論のこと、昼休みには事務部の若い人たちと一緒にできたての工学部グラウンドで野球をしたり、室内では、卓球や麻雀など楽しく過したことが未だに記憶に残っております。昭和44年には学園紛争により工学部管理棟が学生に封鎖され、中央図書室も入ることができませんでした。幸いたった被害もなく、事務部の皆さんと一緒に対処したことも懐かしく思い出されます。

現在の工学分館は、昭和53年4月に設置され、55年11月に新館が竣工しました。また、平成7年2月には分館増築が竣工し、学科図書室を統合しております。

昭和46年4月から本館に戻り、和漢書目録掛で和文タイプによる目録カード作成等にあたりました。現在は、コンピュータ入力による「目録システム」で行っています。

翌47年4月教養部分館が廃止になり本館に統合され、暮には川内キャンパスに新営の図書館（現1号館）が完成しました。本館の蔵書（当時約60万冊）及び教養部分館からの移転作業も新しい図書館で仕事ができるという期待感で、館員全員で汗をながしたものでした。移転が終ったのは昭和48年秋で11月に開館しました。

昭和49年4月相互利用掛、昭和51年6月参考調査掛を経て、昭和53年4月に医学分館運用掛に移りました。当時の医学分館は、大正15年に建てた旧第二内科研究棟の一部を改修した木造3階建てで、書庫は1階にありましたがその他に旧耳鼻科研究棟の一部・旧精神科研究棟の一部と分散しており、資料を探すのが大変でした。同年6月12日午後5時すぎ宮城県沖地震がおり、建物の倒壊、交通遮断、停電・断水等市内は大混乱になりました。図書館も同様に、書架は倒れ本がバラバラに散乱し、大変な被害を被りました。復旧には、かなりの労力と時間がかかり、全員で作業したことも忘れられません。現在の医学分館は、昭和59年1月に新館が竣工しました。

昭和54年5月理学部図書掛長の急逝により、理学部へ行くことになりましたが、理学部も北青葉山地区に移転したばかりで、図書掛がどこにあるのか分からない状態での異動で大変苦労しました。幸い、事務部の皆さんが暖かく迎えてくれたことを非常に感謝しております。理学部で最初に手がけたのは、「理学部所蔵学術雑誌目録」の作成です。当時は、各学科ごとに図書室がありそれぞれが所蔵している雑誌を調べるのに手間取っていたので、大変便利なものでした。現在は、OPACで全学の雑誌の所蔵が分かるようになりました。次に、「分館の建築と学科図書室の統合」です。各学科ごとにある図書室も資料が年々増加し書庫が狭隘化していたので分館建築の気運が高まり、昭和57年4月理学部と薬学部の図書館、北青葉山分館が認められました。当時は分館の建物がないため、化学科の教室を一部借用して閲覧室にしてもらいました。昭和60年10月先生方の努力と理学部事務部の皆さんの協力のもとに北青葉山分館新館が竣工し、図書掛も管理掛と整理・運用掛の2掛になり、それぞれの学科図書室を分館に移転統合することになったのです。統合するにあたっては、24時間分館を利用できるよう「VIPカード」を各研究室に配布したのも、図書館で

は初めての試みでした。

昭和61年4月本館に戻り参考調査掛、12月には電算機システム（T-LINES）が稼働開始しました。平成2年4月和漢書目録情報掛では「目録システム」、平成5年4月相互利用掛では「ILLシステム」と、コンピュータシステムに慣れるのにいろいろと勉強させられました。その間、平成元年11月には本館2号館が竣工、翌2年4月に開館し、また平成6年5月には、1号館書庫増設（電動集書架）の完成をみました。

平成8年4月情報サービス課図書館専門員を命ぜられ、平成11年3月定年退職になります。これが図書館の歴史とともに人生の3分の2を過してきた私の歩みです。

総じて、若い頃の工学部時代、そして中年の理学部時代に経験した図書館人以外の人たちとの交流、仕事は勿論のこと、それ以上にスポーツで一緒に汗をながし、楽しく酒を酌み交わした思い出が強く印象に残っております。

もともとスポーツは好きなので図書館に入ったときから、野球・ソフトボール・バドミントン・テニス等下手の横好きで何でも参加し、50代になってからサッカーにも手をだし、いや足をだして楽しませていただきました。最後までスポーツの現役で卒業できたことは本当に幸せです。一緒に汗をながし、つきあって下さった皆様に感謝しています。

いま、大学も独立行政法人化の問題、定員削減による事務の見直し等厳しい時代になってきています。図書館でも電子的図書館化に向けて始動しています。館員の皆様のご活躍と図書館のますますのご発展をお祈り申し上げます。

40年は長い道のりですが、私にとっては短く感じられます。お世話になりました先生方、良き先輩・同僚・後輩の皆様は心からお礼を申し上げます。いろいろな思い出をたくさん有り難うございました。

（かんの・ひろゆき）

お 知 ら せ

記念資料室の展示が新しくなりました

昨年末以来展示替えのためお休みしておりました記念資料室展示室が、このたび展示内容を一新し、リニューアルオープンいたしました。写真を大幅に増やしたほか、今まで展示されていなかった多くの資料により、東北大学や包摂諸学校の歴史、そこに生きた教官・学生の姿を、よりビジュアルなかたちで復原しています。ぜひお誘い合わせの上御来館ください。

展示内容

- ①東北大学の歩み／東北大学人物志
- ②第二高等学校／教授群像・学生生活
- ③仙台医学専門学校／魯迅と藤野先生
- ④仙台高等工業学校
- ⑤宮城県女子専門学校

⑥東北大学キャンパス史

⑦その他（江沢民主席の書（複製）など）

開館時間 月曜日～金曜日（祝日を除く）
午前10時～午後4時まで

連絡先 022（217）5040



平成11年度開館計画

平成11年度の東北大学附属図書館本館・分館の開館は、下記のとおり予定しておりますので多数ご利用くださるようお願いいたします。なお、この計画を変更する場合は、その都度お知らせいたしますのでご了承願います。

	通 常 時	休 業 時		休 館 日
	開 館 時 間	休 業 期 間	閉 館 時 間	
本 館	平日（月～金） 9:00～21:00 土 9:00～17:00	11. 4. 1（木）～ 4. 3（土） 11. 8. 2（月）～ 8. 21（土） 11. 12. 18（土）～ 12. 27（月） 12. 2. 12（土）～ 3. 31（金）	平日（月～金） 9:00～17:00 土 9:00～12:30	1. 日曜日 2. 国民の祝日に関する法律第3条に規定する休日 3. 本学創立記念日（6月22日） 4. 年末年始（12月28日から翌1月4日まで） 5. 本学学位記授与式当日（3月24日） 6. 館長が必要と認めた日
医 学 分 館	平日（月～金） 9:00～20:00	11. 8. 2（月）～ 8. 31（火）	平日（月～金） 9:00～17:00	1. 土曜日・日曜日 2. 国民の祝日に関する法律第3条に規定する休日 3. 本学創立記念日（6月22日） 4. 年末年始（12月28日から翌1月4日まで） 5. 本学学位記授与式当日（3月24日）の午後 6. 分館長が必要と認めた日
北青葉 山分館	平日（月～金） 9:00～20:00	11. 4. 1（木）～ 4. 7（水） 11. 7. 28（水）～ 8. 31（火） 11. 12. 24（金）～ 12. 27（月） 12. 1. 5（水） 12. 2. 21（月）～ 3. 31（金）	平日（月～金） 9:00～17:00	1. 土曜日・日曜日 2. 国民の祝日に関する法律第3条に規定する休日 3. 本学創立記念日（6月22日） 4. 年末年始（12月28日から翌1月4日まで） 5. 本学学位記授与式当日（3月24日）
工 学 分 館	平日（月～金） 9:00～20:00	11. 4. 1（木）～ 4. 9（金） 11. 7. 28（水）～ 9. 3（金） 11. 12. 24（金）～ 12. 27（月） 12. 1. 5（水）～ 1. 7（金） 12. 2. 28（月）～ 3. 31（金）	平日（月～金） 9:00～17:00	1. 土曜日・日曜日 2. 国民の祝日に関する法律第3条に規定する休日 3. 本学創立記念日（6月22日） 4. 年末年始（12月28日から翌1月4日まで） 5. 本学学位記授与式当日（3月24日） 6. 分館長が必要と認めた日
農 学 分 館	平日（月～金） 9:00～20:00	11. 4. 1（木）～ 4. 7（水） 11. 8. 2（月）～ 8. 27（金） 11. 12. 20（月）～ 12. 27（月） 12. 3. 1（水）～ 3. 31（金）	平日（月～金） 9:00～17:00	1. 土曜日・日曜日 2. 国民の祝日に関する法律第3条に規定する休日 3. 本学創立記念日（6月22日）の午後 4. 年末年始（12月28日から翌1月4日まで） 5. 本学学位記授与式当日（3月24日）の午後 6. 分館長が必要と認めた日

会 議

◎学 内

11. 1.28 電子情報データベースサービス検討委員会

2. 1 記念資料室運営委員会専門委員会

2. 9 平成10年度第3回分館長会議

・協議事項

- (1) 平成10年度図書館資料費予算について
- (2) その他

・報告事項

- (1) 各分館の状況について
- (2) 製本雑誌の利用について
- (3) その他

2.16 記念資料室運営委員会

11. 2.22 平成10年度第3回商議会

・協議事項

- (1) 東北大学附属図書館事務部事務分掌規程の一部改正について

- (2) 東北大学附属図書館本館利用細則の一部改正について

- (3) 平成12年度概算要求事項について

- (4) T-LINES次期システム検討委員会の設置について

- (5) 東北大学附属図書館所蔵「漱石文庫」マイクロフィルム、カラーフィルム及びフォトCDの仙台文学館における利用について

・報告事項

- (1) 平成10年度図書館資料費予算について
- (2) 各分館の状況について
- (3) その他

◎学 外

11. 1.21国立大学附属図書館事務部長会議 (於：三重大学)

編 集 後 記

静かに明けた平成11年も3ヶ月を過ぎようとしています。最近、「脳死移植」や「だんご3兄弟」が社会的な話題として賑い、また、職場内では、「セクシャル・ハラスメント」が話題として取り上げられております。

一方、大学図書館は利用者からのニーズの拡大、さらには図書館を取り巻く環境の変化に対応していくことが求められており、本学附属図書館では、これらに対応するため、本年4月から、情報管理課の事務組織を再編「和漢書目録情報掛と洋書目録情報掛を統合して図書情報掛を設置、電子情報掛を新設、逐次刊行物掛を雑誌情報掛に名称変更」することにいたしました。

さて、本誌23巻も最終号となりましたが、今号は、東北大学附属図書館はもとより図書館界に永年勤務されて退官される方々におかれまして、「退官するにあたって」のご寄稿をいただきました。各人の永年にわたる斯界への思いを読み取っていただければ幸いです。

年度末という大変お忙しい中、本号のためにご寄稿いただきました皆様本当にありがとうございます。心からお礼申し上げます。

なお、毎年のことではありますが、新年度を迎えるに当たり、広報委員会ではより良き「木遣子」の発行を目指したいと考えております。

読者の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

東北大学附属図書館館報「木遣子」 第23巻第4号（通巻85号）発行日 平成11年3月31日

発行人 辻 英雄 広報委員長 谷内 聡

発行所 東北大学附属図書館 仙台市青葉区川内 電話 022-217-5910

正 誤 表

P 1 5 2 行 目

事務部長 誤 辻 秀雄

事務部長 正 辻 英雄